外国のタクシー事情

白川　隆久

外国のタクシー事情

白川　隆久

平成五年一月、ジャカルタのインター・コンチネンタルホテルのフロントでタクシーを依頼、タクシー・マネージャーは、玄関で私と家内の足元から頭の先までしげしげと見て、新鋭タクシーが並ぶ、その向こう側のボロタクシーをサインで呼んだ。運転手は実直そうだったが、車体は全く醜いボンコツ車であった。行く先は、旧オランダ東インド会社（江戸時代・長崎貿易の拠点）の跡、オランダ本国の水門と同型の水門、スンダ・クラバ港（現在のジャカルタ国際港より東、旧来の港）、車は走り出した。冷房は無し。酷暑。窓を開けると砂塵は車内に舞い込む。もっと驚いたのは、一旦停車して貰い、その後出発する都度、車の前の所でエナーシャーを数分間、手で回転させ、運転席に戻るとエンジンにコンタクト、車はやっと動き出す。昭和二十三、四年頃、田舎のバスでこの光景を見たことを思い出す。将に交通博物館に鎮座すべき迷車に平成の御代に乗るとは考えられない出来事だった。

スンダ・クラバ港は、数百隻のスクーナー型帆船がズラリと並んでそれは壮観だった。白人観光客は何人か見かけたが、日本人は見かけなかった。

ホテルに帰り、タクシー代の支払いを済ませ、コーヒーを飲みながら家内と話し合った。

「あのオンボロ車に乗せられたのは無理もないな！」

「私達の姿・形を見れば当然でしょう」

実は、このパック旅行、バリ島バリ・ビーチホテルで第一泊、午前から私達が観光に出かけた後、正午頃出火、ホテルは全焼（大きな火災では耐火金庫も駄目）全員着の身着のままとなり、色々な事情で流れ解散になった。それから五日間、折角ここまで来ているのだから、ボロブドウルやジョグ・ジャカルタ、ジャカルタの主な所だけは見て帰ろうと、家内と一緒に頑張った。しかし、旅先ですべての荷物を失うと、かくも酷いことになろうとは。髭はぼうぼう、汚れた運動靴、垢まみれのシャツにズボン姿、これはもうルンペンである。

「見知らぬ所では、人の服装、姿、形を見て判断するしか判断の材料は無いのだから」

「タクシー代、踏み倒されはしないかと心配だったろうな」

旅の七日目、成田へ到着、一月の日本は厳寒、丸亀へ到着するまで、シャツの重ね着（常夏の国ではシャツより分厚い物は売っていない。）敗残兵もかくやという姿で家へ

辿りついた。

二年前のマルタ島。夕食までに三十分の時間があった。ヨハネ騎士団とオスマン・トルコの激戦があったこの島で、ヨハネ騎士団の野戦病院跡（今はユネスコ機関）の写真だけでも撮っておきたくて、ホテルのフロントで行き先を告げ、タクシーを手配してもらった。念のため、料金を聞くと十ドルで大丈夫と言われた。

マルタ島のタクシーは気をつけないと、特に日本人だとわかると三倍はフッカケられると石川和恵さんの『マルタ島に魅せられて』に書いてあったのを思い出し、念には念を入れてフロントの人に立ち会ってもらい乗車した。運転席と助手席に計二人が乗っていた。途中、他の見所を幾つも勧められたが、断り続け、目的物だけを写真に収めて帰路につく。途中で「日本人か」と問いかけてきた。日本人だと言ってはいけないと石川さんの本には再三、注意がしてあったのに、瞬間、「そうだ」と誘導尋問に引っかかってしまった。拙いなと思っているうちに、ホテル前から少し離れた所に停車した。二人が降り、私も降りた。「いくらか」と問うと「三十ドル」と言う。私は十ドルだけを運転手に渡し、「問題があるなら、フロントで話そう」と言い、サッサとホテルへ入ろうとした。助手席にいたのが怖い顔をして通せんぼをしたが、運転席にいたのが、私の剣幕を見て、「これは無理だ」と助手席のに話しかけ、難を逃れた。

二年前の六月、宿はイギリス湖水地方のボーネス。ここからハドリアン・ウオール（ローマ皇帝ハドリアヌスが、北方の敵ケルト人の侵入に備えて紀元一二二年、東はニュー・キャッスルから西はカーライルまで延々一一八キロの大城壁を作った。イギリス版「万里の長城」と呼ばれる。）を見たくてフロントの人に、ハドリアン・ウオールを見たいので、地理に詳しく誠実なタクシー・ドライバーをと依頼した。背の高い好青年がやってきた。ドライバーと料金を交渉。パーシャル・プライス（往復・見学所要時間を含む）料金、八十ポンド（二万五千円）所要時間、四時間で契約がまとまった。

車はカーライルへ向けてまっすぐ北上、今残っている城壁はカーライルから更に東へ車で三十分。

到着するや、急に激しい雨が降ってきた。私のカメラが濡れないように、彼は懸命に傘をさしかける。帰りかけると嘘のように雨が止む（イギリスでは外出に傘が必需品）。ボーネスの宿が近づく頃、時間はまだ三十分程余っていた。私と家内は車の中でチップをいくらやるかを相談しはじめた。彼には〇ポンドという音声しかわからない。「八ポンド」「いや、十ポンド」と話し合っていると、彼はまだ約

束の四時間がきていないから値切る相談をしていると勘違いしたらしく、「近くにある景色の美しい所へ行かないか」と誘う。断ると、交差点ごとにゆっくりと停車、老人を見かけると「渡れ」「渡れ」と先を譲る。明らかに時間稼ぎをした。それでも約束の四時間より二十分程、早く着いてしまった。彼の挙動は値切られると思って、極めて心配そうだった。ホテルへ入って、机の上に約束の八十ポンドを並べて支払うと、その時の彼の嬉しそうな顔、その上に十ポンドをチップとして渡すと、彼は、これは受け取れないと一旦辞退した（チップを出して辞退されたのは、これが初めて）。再度すすめると、嬉しそうに押し頂き、財布から五ポンドの記念コインを取り出し、プレゼントするから受け取ってくれと頼んだ。私も喜んでこれに応じた。何回も握手を繰り返しながら、彼はホテルを後にした。

三年前、広州（広東）の空港で、日本へ帰国する便に、約二時間の余裕があった。ここからアヘン戦争の三元里反英闘争の記念物が残っている場所までは、車で二十分の筈だ。空港前には流しのタクシーが充満している。一台のタクシーに、往復料金を尋ねると二百元（三千円）だと吹きかけた。広州市内を二時間余り、誠心誠意案内してくれた、リー・ガーデンホテルの専属タクシー・ドライバーの料金が八十元であったことを考えると、法外な値段である。次のタクシーは百元だという。高いとは思ったが、前のに比べると半値なので決めた。

三元里は長い間もてはやされた民族闘争の遺跡だが、次第に忘れ去られようとしている（後からの侵略があると、先の侵略は次第に薄められる）。反英闘争記念碑はすぐ判ったが、記念館はかなり離れた所にあると聞いていた。タクシーを待たせて探さなければならない。タクシーを返すと、帰りのタクシーが拾えそうにない（それほど観にくる人が減っている）。止むを得ぬと考え、紙に「待車料五十元」と提示すると彼は相好を崩して、O・Kという（後で、家内は気前が良いのにも程があると私をなじったが、私は今も正解であったと思っている）。

記念館を探すのに、彼は懸命になってくれ、やっと見付けてくれたが、行ってみると、客が来ないのか鍵が掛かっている。記念館は当時の社学（郷村教育機関）。今を去る百六十年前、広東に侵入した英軍は、掠奪・暴行・殺戮・非道の限りをつくした。あまりの残虐さにたまりかねた三元里の住民は、郷紳・農民ともに団結して「社学」を中心に反英武装闘争に立ち上がった。遂には英軍を追いつめ、殲滅の機がやってきた。ところが清朝政府は英軍との和睦を考え、人民軍に圧力をかけ、英軍の退却に手を貸してしまった。

記念館は外から覗くしかなかった。当時の武器や決起の

スローガンをみただけに終わった。

二年前の九月、ワイマールのホテル・エレファント（ゲーテの定宿だった。象屋さん）のフロントにタクシーを依頼、ミュールハウゼンを目指す。やって来たドライバーに用意していた地図を広げ、ミュールハウゼンの「マリエンヌ教会」「トーマス・ミュンツアー像」「フラウエン・ゲート（女門）」等を指で押さえながら、見て回りたいところを告げた。「チャーチ」と発音してもどうしても通じない。やっと「キルヘ」を思いだし、了解（旧東ドイツでは英語教育をロシア語教育に代えたので英語は全然通じない）。

途中、エアフルトで道路工事のため、交通渋滞にひっかかる（旧東ドイツは社会資本が遅れ、最近、各所で道路工事が行われている。それは旧西ドイツの人々が払わされている団結税――所得の七・四％の負担である）。

ミュールハウゼンのフラウエン・ゲートを入ったところの肉屋さんで、ドライバーが私の示した地図で場所や順路の確認をした。肉屋のおかみさんは、ここ数年、日本人は誰も来ていないという。女門近くに立つトマス・ミュンツアー像（マルチン・ルターの宗教改革の影響を受け、ミュールハウゼンのマリエンヌ教会牧師となり、ルターが「神の前の人間の平等」を唱えたのに飽きたらず、ルターと対決、「現世における人間の平等」を唱え、チューリンゲンの貧農に階級闘争を指導、ドイツ農民闘争の中心人物となる）。像の周りには雑草が生い茂り、像のすぐ横には鉄製の大きなゴミ箱が据えつけられているのを見て、隔世の感を禁じ得なかった。

帰路、またエアフルト付近でラッシュにひっかかり、四時間の約束が五時間を要したが、パーシャル・プライス三〇〇マルク（二万四千円）と僅かのチップで、気持ちよく帰っていった。

定年退職後、九年間で四十回の海外旅行をこなし、その間、数えきれない程タクシーに乗ってみた。良かったのと悪かったのを比較すると、ほぼ相半ばする。一般に流しのタクシーは悪く、ホテルのフロントで綿密な交渉をして乗ったのは良かった。今でも、もう一度会いたいと思うドライバーがいる。

それから、もうこんなことをしては駄目だと思うのは、昨年五月、ケルン空港へ夜の九時に一人で降り立ち、スーツケースをひっぱりながら便所に入り、小用をすませた後、タクシーでアーヘンまでの暗い夜道をホテルまで一時間走った事、その時の孤独感、寂寥感、不安感。若い時とは違って、もう古稀を迎える者のすることではない。

★☆

続・外国のタクシー事情

白川　隆久

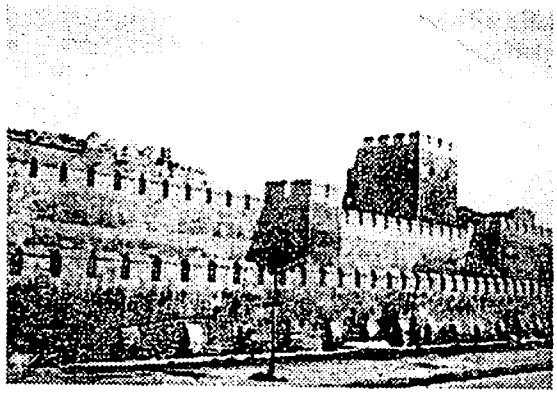
トルコの巻

平成四年七月、トルコのイスタンブール、グランド・バザールの混雑の中で、ガイドのミス・グリーンにタクシーを物色して貰った。行き先はスレイマン大帝のモスク、メフメット二世のモスク、テオドシウスの三重城壁、ルーメル・ヒサールと第二ボスポラス大橋。イズミール大学の日本語学科を卒業し、親日家の多いトルコでも特に日本びいきの彼女は、観光地以外の場所に興味を示す日本人に好奇心と好意を感じてか、数人のドライバーに当たって、この人ならというドライバーを推薦してくれた。

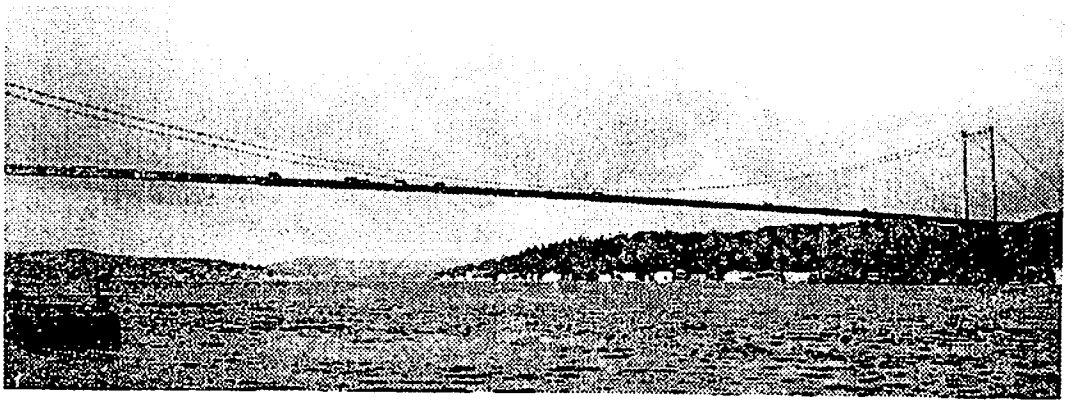
タクシーは、スレイマン大帝（十六世紀のオスマン・トルコの名君）のモスク、ついでメフメット二世（イスタンブールを陥落させ、東ローマ帝国を滅ぼした征服王）のモスクへ、私と家内は念の為、リュックを背負ってタクシーを降りた。いずれも荘厳と静寂の世界。

次にタクシーはテオドシウス帝の作らせた三重城壁、その中心のエディルネ門に向かう。日本人は来ないが欧米のツアー・バスは大挙して路上に並ぶ。（一四五三年、オスマン・トルコは東ローマ帝国の都イスタンブールに総攻撃を加える。東ローマからの救援依頼を受けた西欧キリスト教世界は、英・仏百年戦争の最中で救援軍を送れず、為に東ローマ帝国は滅亡した。）欧米人にはその時の事に負い目があるらしい。

テオドシウスの三重城壁は確かに凄い。フン王アッチラ以来の十数回にわたるアジア側の攻撃を防ぎ、西欧世界を守った城壁と、最後に中央突破されたエディルネ門周辺の石のかけらに激戦の憶いを馳せ、白馬に跨り、戦塵の中に消え去った東ローマ最後の皇帝、コンスタン十一世の最期を思いながら城壁を彷徨してい



テオドシウス（4世紀のローマ皇帝）の三重城壁



ボスポラス第二大橋　手前（左側）ヨーロッパ側のルーメル・ヒサール、
対岸（右側）アジア側のアナトリア・ヒサール（第一大橋は1973年に開通した）

ると、ドライバー氏が作り笑いをしながらちかづいてきた。「ムッシュー・エ・アシスタント……」私はどうやら研究者、家内は助手と映じたのだろう。城壁の写真ばかりを撮り、人を被写体にしないので、御両人で一枚と、写真を撮ってくれ、小さい紙切れを私に示し、現在でタクシー代（待ち時間を含む）は幾らになっていると説明した。これを報らせるタイミングを図っていたようだ。それから以後はメーター料金が一巡してメーターが切り替わるごとに、現在で幾らだとの料金用紙を渡す。高額になってきたタクシー代が気がかりになって仕方がない様子だった。

タクシーはヌーメル・ヒサールに着く。当時ベネチアとジェノアの海軍が黒海を拠点に、イスタンブールへの物資を補給していた。メフメット二世はイスタンブールを孤立させるために、アジア側にアナトリア・ヒサールを、この対岸のヨーロッパ側にヌーメル・ヒサールを築き、それぞれ砲台を建設した。この両砲台に挟まれたボスポラス海峡の幅は六百メートル、両砲台の同時砲撃により、イスタンブールは孤立した。この陣地を見て回るのに私も家内もリュックをタクシーの中に放り込んだまま、ドライバー氏はまた料金表を私に見せる。私は「ヤァー、O・K」。ついでボスポラス第二大橋の橋脚に向かう。

ボスポラス第一大橋はイギリスが中心となったヨーロッパ諸国企業連合が落札、車と人の併用橋で、欧亜を結ぶ最初の橋となった。第二大橋は石川島を盟主とする日本のみの企業連合体が入札に成功、車のみの橋だが、第一大橋の工期が大幅に遅れたのに比し、工期内に完成したのと、橋の美しさが比類ないとドライバー氏はトルコの国民を代表して鼻をうごめかした。

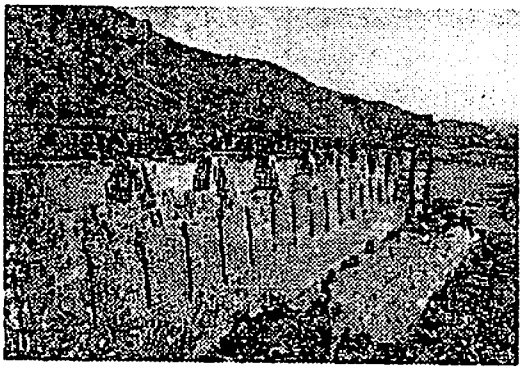
帰路、タクシーがホテルに近づくとドライバー氏が「ム

ッシューはジェントルマンだから、タクシー代はきちんと払ってくれるでしょうね」と話しかけてきた。「勿論、ヤァー」と言うと、全身に喜びが溢れ、相好を崩し、「今日は最高の日だ。宝籤を買ってくるから、一寸だけ待って欲しい」と籤販売所に走った。ホテルに到着し、車を降りる時、二時間半の車代とチップを加えて四十万リラ（日本円、一万円、トルコでは大金）を渡すと、彼の身体全体から喜びが溢れ、最敬礼と握手の末に別れた。

エジプトの巻

平成九年十一月、念願のエジプトへ行った。大手の旅行会社からツアー旅行の熱心な勧誘を受けたが、企画書にはアレキサンドリアが入っていない。どうしてもアレキサンドリアに行きたいので中堅旅行会社のツアーを選んだ。アレキサンドリアにこだわったのは、エジプト・プトレマイオス朝の都であり、ヘレニズム世界最大の文化都市であり、最近の発掘では女王クレオパトラの宮殿が、港内の海底に姿を見せはじめた。もう一つの理由は、アレキサンドリアから、海岸線に沿って真西にタクシーを走らせると、二時間でエル・アラメインに着く。第二次大戦最大の激戦地でロンメル将軍率いる独・伊軍とモンゴメリーの英軍が激突、両軍併せて七万五千の戦死者が出た。敗戦にも拘わらず、独・伊側は慰霊場を設け、慰霊の祭りを欠かさない。その状況を一目見ておきたい願望がある。

アレキサンドリアにこだわったことが、私と家内の生命を取り止める幸運をもたらすことになろうとは。運・不運は時間軸と空間軸の交点によって定まる。十一月十七日、



ルクソール　ハトシェプスト女王葬祭殿のテラス
テロによる惨劇の２日後の写真。このテラスで銃撃されると逃げ場がない。

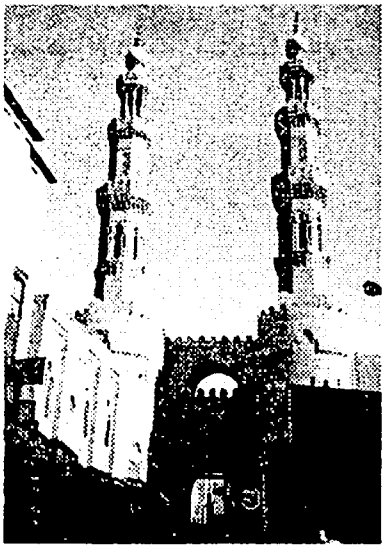
アレキサンドリアからカイロへ戻る我々の乗っているツアー・バス
アレキサンドリアの警察とカイロの警察の警備の引き継ぎ

午前九時、私達のツアーはアスワン・ハイダムの見学をしていた。同じ時間、大手旅行社のツアーは、そこから下流のルクソール、ハトシェプスト女王葬祭殿にいた。突如、イスラム原理主義者のテロが始まった。日本人旅行者十人を含む六十数人が、ゲリラの凶弾に倒れた。二日後、私達はこの場に立った。現場では水を流し血を拭きとっていた。私達は心からの黙祷を捧げた。

その頃、丸亀の行きつけの喫茶店では、私と家内の安否を気遣ってくれる人達が集まっていた。帰国後、その時の状況報告をし、二日間の日程違いで無事だったと言ったのに、噂では二時間違いで助かったと広まってしまった。事件以来、ホテルはガラ空き、ツアー・バスの前後は、エジプト軍の車両に護られる移動になってしまった。（これ以上、事件が起こると、国家の威信に関わる。）アレキサンドリアに着いてもエル・アラメインまでは許可される筈が無かった。早朝、タクシーを駆って、市内のアブキール湾（物静かな漁村、かつて英のネルソン艦隊がナポレオン艦隊を撃滅したところ）を見るのが精一杯だった。

アレキサンドリアからカイロへの帰りは、前後・左右をパトカーに守られながらの二時間に及ぶV・I・P道中であった。

カイロに着いてから空港までの空き時間、土産買いの時間を利用して、カイロ市内のモスクとコプト派キリスト教会をタクシーで見て回ることにする。イブン・トゥルン・モスク。スルタン・ハッサン・モスク等々。美しいモスクが続く。ズワイラ門（ファーティマ朝が、十世紀、エジプトを支配した時に作らせた城門）まで来て、最初に渡してあったメモにはアズハラ・モスクと書いておいたのにそこを素通りする。催促したが無視された。（このモスクはイスラム最大の大学が併設されており、テロとの



オールド・カイロのズワイラ門
この門の内側（こちら側）がオールド・カイロ。数多くのモスク、コプト派キリスト教会が散在する。
門は900年を越えて健在。

ラムセス・ヒルトン・ホテルで
オールド・カイロを走って貰ったタクシー・ドライバーと記念のために。
ホテル従業員も暇を持て余している。

関連からか、或いは入るのに手続きが大変なのか、理由はわからずじまい。）

コプト派キリスト教会（五世紀、ローマ・カトリック教会から分離、東方教会的要素が強い。）の聖母教会前では、軍関係の検問が行われていた。私達は運良く咎められず、聖セルジュース教会では日曜日のミサにもぐり込めた。ギリシャ正教に似ており、荘厳な儀式、司祭の服装もおごそかで美しかった。

カイロ、ラムセス・ヒルトン・ホテルに戻ると、タクシーの溜まり場に、フロントの接客係、タクシー係も出て来て、数名のドライバーに囲まれ、もっとタクシーに乗って見て回ったらとすすめられる。日本へのフライト時間が迫っているからもう駄目だと時計を示しながら説明しても、こちらの発音がおかしいからか、或いは解っていながら暇だから、からかっているのか、笑いながら面白がってしつこくすすめる。遂に家内が時計の時刻を指さし、鳥の羽ばたく姿、バタバタをすると、了解、了解で大笑いの末、解散。陽気な連中だった。

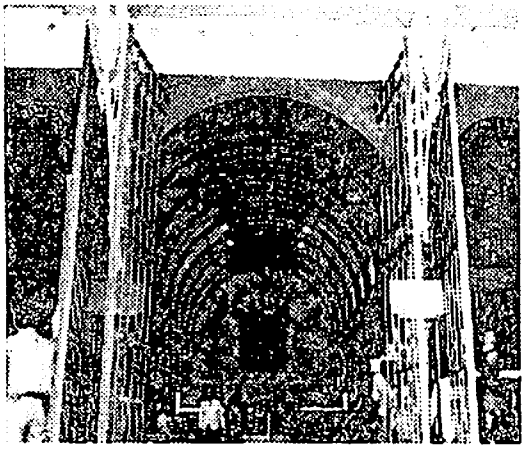
ヴェトナムの巻

平成十一年一月、ヴェトナムのツアー旅行に参加した。事前に『地球の歩き方―ヴェトナム編』を読むと、旅行者の報告によるホーチミン市（旧サイゴン市）のタクシー事情はあまりにも悪辣な事例に充ちている。メーターを改悪して料金がドンドン上がるもの。ドンの単位が途中で数字は変わらず単位だけドルに変わるもの。あるいは凄味をきかせるもの等々、この国ではタクシーは使えないぞと思う。

ファン・ボイ・チャウ(1867～1940)の墓

ところが、フエ（ヴェトナム中部の古都）で昼食に入ったレストランの地図を見ると、ファン・ボイ・チャウ（明治三十八年来日、大隈重信の知遇を得て『ヴェトナム亡国史』を著し、ついでヴェトナム各地で反仏独立運動を起こし、捕らえられてフエで死す。私は若い日、『ヴェトナム亡国史』を読み、感動し、ファン・ボイ・チャウの崇拝者。）の墓は、そう遠くではない。昼食を抜いてタクシーで行けばと思うと、もう矢も盾もたまらない。添乗員に話し、ガイドと三人で相談すると、ツアー客の皆さんが昼食を食べている時間内に済むのであれば構わない。数年前までは酷いドライバーがいたが、今は自由競争でタクシーが増え、

メーターは正確、治安も大丈夫との事、ガイドが電話でタクシー会社に連絡、やってきたドライバーはガイドと綿密な打ち合わせをし、出発。タクシーは山の方へ向かって走り出す。おかしいと思っているうちに集団墓地に着く。様子から見て、ヴェトナム戦争の戦没者慰霊墓地らしい。ここには用は無いが死者の霊に敬意を払うのは悪い事ではないので黙祷を捧げる。周りが暗くなり、雨が降ってきた。時間も気になり、ファン・ボイ・チャウの墓に急げと催促する。タクシーは泥水を跳ねながら、やっと目的地に着く。ファン・ボイ・チャウの晩年の住まい（フランス官憲による軟禁）と墓は、記念館の形で保存され、よく管理が行き届いていた。先程までお詣りする人がいたのか、香の残り香と美しい花が供えられていた。墓に詣で、清涼感と満足感に浸りながら、車はレストランに戻る。時間は一時間弱、料金は十一万ドン（日本円、千円）。レストランでは、食事が終わりデザートに移っていた。事情を知った食堂の人々は大急ぎでチャーハンと麺を作ってくれた。時間が無いので半分程を大急ぎで頂いたが、そのおいしかったこと、何よりも親切の気持ちが料理に乗り移っていたようだ。（どうして、戦没者の慰霊墓地に連れて行かれたかは解らない。今になって思うのは、不思議な日本人がいて墓地に案内しろという。ファン・ボイ・チャウの墓を地図で指さす。ファン・ボイ・チャウの事など、異国の人が知っている筈は無かろう。墓であれば満足するのだろう。—ガイドとドライバーの相談もその事だったのだろう—　ところが、慰霊墓地はそこそこに、ファン・ボイ・チャウと大声を出す。これはそこへ連れて行かねばなるまいとなったのだろう。）

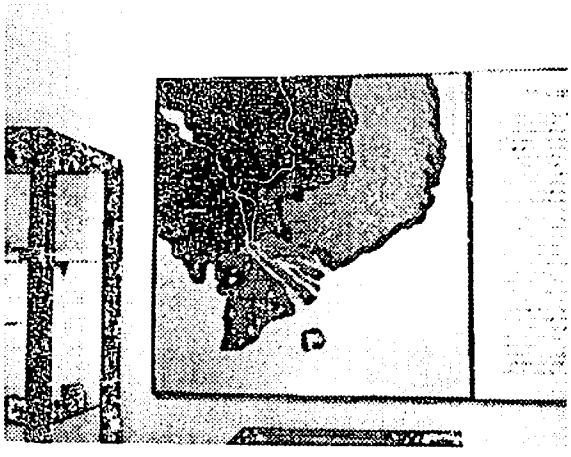


ホーチミン市（旧サイゴン）中央郵便局
19世紀末、フランス統治時代に建てられた。外観も立派だが、内部の半円形の天井は見応えがある。

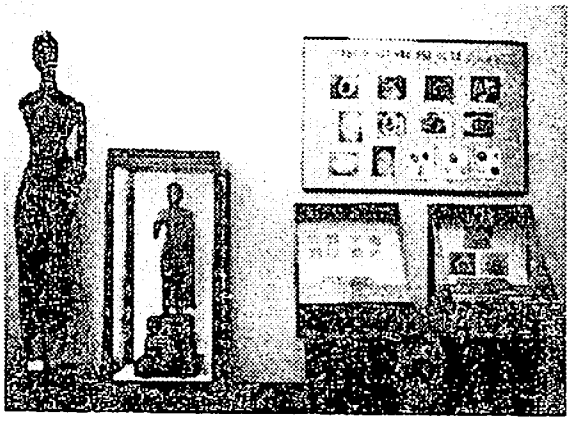
ホーチミン市（旧サイゴン市）を離れる日、午前中の自由時間を利用してタクシーに乗ることにする。行き先は歴史博物館、その後、市内を一巡して、一旦ホテルに帰り、荷物を持って、決められた時刻に、空港近くのレストランでツアーに落ち合うことにする。条件をメモにし、タクシーを頼むと、恰幅はよいが、すこしヤクザっぽい感じのタクシー係のお兄ちゃんが、料金は二十米ドル、前金で出せ

と言う。二十ドルを払うと、領収書を書き、しばらくすると痩せぎすで貧相な感じがするドライバーを連れてくる。車はメーターが付いていないのでハイヤーである。（定義は曖昧になってきつつあるが、メーター付き営業用自動車がタクシーであり、メーター無しの貸しきり自動車がハイヤーである。）

歴史博物館に入る。ここのお目当ては、オケオ遺跡の出土品である。オケオ遺跡は一、二世紀、ヴェトナム南部に栄えた扶南国の外港で、扶南国の繁栄ぶりや、当時の海上交通、貿易の有り様を知る事が出来る。ローマ皇帝マルクス・アウレリウスの金貨など、出土品は一箇所に集められているので、すぐわかったが、説明はヴェトナム語のみ、文字が一字も読めないのは酷く悲しい。



オケオ遺跡の位置（ホーチミン市、歴史博物館）



オケオ遺跡の出土品

一旦、ホテルに帰り、荷物をまとめて、車の所へ戻って来ると、ドライバーとタクシー係のお兄ちゃんが激しく口論している。ドライバーの胸ポケットからドンの紙幣がはみ出しており、それを出したり入れたりしながらの口論である。察するに、タクシー係から渡された労賃が少なかったのであろう。（恐らくはピンはね）ドライバーは激しく食ってかかっていたが、言いくるめられたのか、悲しそうな顔をしながら最後にあきらめた。

目的地、空港近くのレストランに着き、車を降りる時、先程の労賃のやりとりが目に浮かび、チップをはずんだ。彼はチップを全く予想していなかったようだ。（支払いはすでに済んでいる。）爆発的な喜びを身体全体で表し、それから深々と礼をし、去って行った。

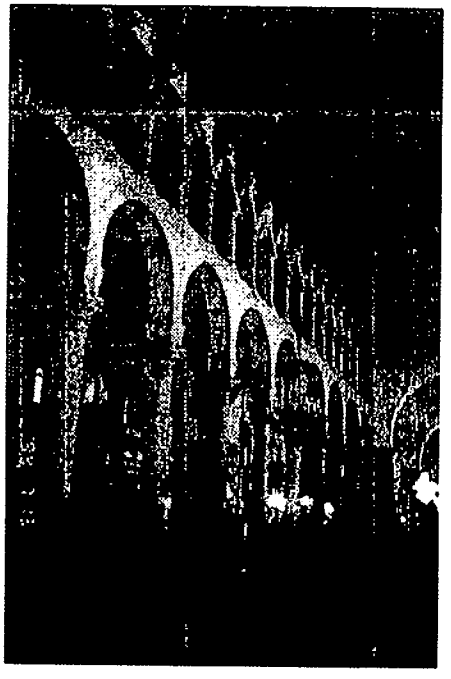
シリア、ヨルダン紀行

白川　隆久

二年越しの念願が叶って、シリア、ヨルダンへ旅した。旅の第一の目的は、ウマイア・モスクを見ることと、サラディンの墓に詣でること。第二の目的は、パルミュラ、ペトラの遺跡を見ること。第三の目的は、イスラエルとシリア・ヨルダンの緊張と和平について何かを体験できたらとの思いであった。旅行前、多くの人から「秘境の旅ですね」「どうして、そんな辺境の土地へ行くのですか」「危険な処でしょう。生命がけの旅ですね。」等の声がかかったが、全く不安は感じなかった。

シリアもヨルダンも国内の治安は良く、教育度も高く、道徳心堅固で、人々は勤勉である。その上、両国国民とも親日的で、日本人が両国を理解している度合いに比べ、遥かに多くの人が日本を理解し、日本への期待を寄せている。その理由の一つは、同じアジア人としての親近感、今一つは、今日の大国で、中近東を侵略したことのない唯一の国である。

まず、旅の第一の目的。ウマイア・モスクは雷神ハダットの神殿を、ローマ時代にテオドシウス帝（キリスト教を国教にした皇帝）がこわして洗礼者のヨハネ教会をつくった。今度はイスラムのウマイア朝時代になると、カリフが教会を没収してモスクを建てた（七〇八年）。メディナの預言者のモスクとウマイア・モスクは、最も美しいモスクの双璧といわれるだけあって実に壮麗である。中庭は白大理石を敷きつめ、建物も白大理石の列柱美を見せ、回廊のモザイク画は天国もかくやと思わせる。ヨハネの墓が礼拝所の中央近くに安置されていることに感動を覚えた。



ウマイア・モスクの内部。
左端に洗礼者ヨハネの墓が見える。

サラディン（エジプト・アユーブ朝の建国者、イスラム勢力を結集して十字軍を破り、一一八七年イエルサレムを回復、第三回十字軍では、英の獅子王リチャードと双方が騎士道に基づく正々堂々の戦いを演じ、最後はサラディンがキリスト教徒巡礼を保護することで和平が成立した。ウォルター・スコットの歴史小説『タリスマン』はこの両者の英雄的な戦いを描き、今も西欧人に多くのサラディン、ファンがいる）の墓は、ウマイア・モスクに隣接するマドラサ（神学校）内に厳粛に祭られていた。

第二の目的。パルミュラはシリア砂漠のふちにある。漢とローマを結んだシルクロードの隊商基地として、三世紀には極盛を迎えた。ローマ帝国から自治権を得ていたが、女王ゼノビアの野心がもとでローマと敵対し、ローマ皇帝に完全に破壊された。その当時の遺跡が砂に埋もれながら壮大な姿を留めている。一キロに及ぶ列柱、城塞、神殿、劇場が建ち並び、東端には巨大なバール神殿が、西の岩山にはイスラム時代のアラブ城砦が建つ。夕刻、この城砦に登った。頂上からのパルミュラの遺跡群とオアシスの長めは実に壮観であり、落日は感動的であった。

ペトラはイエーメンから北上したルートがエジプト・シリア・メソポタミアに分れる分岐点で、二世紀に全盛期を迎えた隊商都市。隊商路の変更で忘れ去られ、十九世紀、ドイツ人に発見されるまで、千数百年間の眠りについていた。

ペトラへはベドウィンの馬子の引く馬に乗って三キロのワディ（昔の川床）を通って行く。両側の切り立った岩は美しい縞模様を見せ、時には馬一頭がやっと通れる狭隘な所を進む。薄暗いワディを通り抜けると目の前がパッと開けて広場に出る。その正面にバラの神殿（エル・ハズネ）が、高さ30米のファサードとなって妖艶な美しさを漂わせて居る。道を右手に進むと町の中心街で、劇場・宮殿・列柱街道の壮大な遺跡が広がっている。

シリア・ヨルダンは遺跡の宝庫である。他にもシリアのアレッポエブラ（発掘中）クラーク・デ・シュバリエ（十字軍の騎士の城）が素晴らしい。特にヨルダンのジェラシでは四キロに及ぶ雄大な遺跡を灼熱の太陽に照らされながら（ホーロクで豆を煎られる感じ、60度らしい）歩いたのは強烈な印象として残る。

第三の目的。七月二十日、私達はモーゼの終焉の地ネバ山を経て死海に出ることになっていた。ところがこの日、死海に通ずる道は全面遮断。途中から引き返さざるを得なかった。この日、米国務長官とイスラエル外相が死海の極秘の場所に来て、フセイン国王と会談を行った。イスラエルの高官がヨルダンを訪れたのはこれが最初である。これ

を踏まえて数日後、イスラエル・ヨルダンの平和宣言が調印された。

七月十九日、アンマンのホテルで四人連れの日本人と出会った。一人は外務省の役人、他の三人は国際協力事業団（ＪＩＣＡ）の職員。話を伺ったところ、ヨルダン政府からの依頼で二十一世紀をにらんだヨルダンの観光振興のマスタープランづくりをするために来たという。平和が本格的になりつつある現在、観光産業のノウハウを持たないこの国に役立つこと大であろう。いわば「観光版ＯＤＡ」である。ヨルダンが日本にぐっと近づいたと思った。来年はウズベク共和国（サマルカンドが中心）で同様の仕事をするという。

この九月、私はチムール（十四世紀の英雄）が、こよなく愛したサマルカンドへロマンを求めて旅立つ。